

Title	タキーザーデとイラン立憲思想(下)
Sub Title	Taqizade and the Iranian constitutional thought
Author	佐野, 東生(Sano, Tosei)
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.69, No.3/4 (2000. 5) ,p.127(459)- 154(486)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000500-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タキーザーデとイラン立憲思想 (下)

佐野東生

第二章 『カーヴェ』紙における立憲思想

第一節 『カーヴェ』紙について

『カーヴェ』紙は、タキーザーデがベルリンで一九一六年から一九二一年にかけて発行した政治・文化紙である。タキーザーデはアメリカ滞在中、ニューヨーク駐在ドイツ総領事から親独宣伝活動への協力要請を受け、一九一四年、ドイツに渡った。第一次大戦に際し、ベルリンでドイツ外務省の支援の下、イラン民族主義委員会 Komite-ye Meliyun-e Iran を結成した。タキーザーデは、ジヤマルザーデ Seyyed Mohammad 'Ali Jamalzade、カズヴィーニー Mirza Mohammad Khan Qazvini、ライラン・ナシヨナリスト系知識人をヨーロッパ各地からベルリンに呼び、親独宣伝と共にイラン民族運動を展開する。⁽³⁷⁾

タキーザーデとイラン立憲思想 (下)

その一環として、ドイツの東洋学者とベルリン在住のイラン知識人が参加するイラン文化サークルの結成などと共に、『カーヴェ』紙がドイツの資金援助を受けて創刊された。

カーヴェは、フェルドウースイーの『シャール・ナーメ』にも登場する古代イランの伝説上の人物であり、アラブ系の暴君ザッハークに対し民族的抵抗運動を先導し、伝説的王朝・ピーシュダーデー朝の嫡流であるフェリードウーンを王位に就かせたとされるイスファハーンの鍛冶屋である。その振りかざした旗は、「カーヴェの旗」*derafsh-e kayyani* と呼ばれ、イラン民族精神の象徴となつたとされる。⁽³⁸⁾ タキーザーデは、同紙創刊号において、第一次大戦に際し、英・露に対するイラン国民の抗戦を主張するとともに、イラン国民がロシアに対し、再

びカーヴェの旗を振りかざして抵抗運動を展開するよう呼びかけるため、同紙を『カーヴェ』と名付けた、としている。⁽³⁹⁾ タキーザーデのナシヨナリズムはここでも健在であった。

『カーヴェ』紙は、第一次大戦からその直後にかけての約三年半に発行された旧シリーズ(一九一六年一月二日から一九一九年八月一五日にかけて三五号発行)と、戦後の二年間に発行された新シリーズ(一九二〇年一月二日から一九二一年一月一日にかけて二四号発行)、及び一九二二年三月三〇日の特別最終号に分かれる。タキーザーデが編集主幹となり、ジャマルザーデ、カズヴィーニーが共同執筆・編集を行った。旧シリーズは主にヨーロッパ戦線、イランの戦況報告と共に、反英・反露の政治記事が掲載され、民族主義的立場からのイラン文化紹介もなされた。

これに対し新シリーズは、ドイツ敗北によるドイツの援助停止に伴い、商業ベースに変わった。これ以後『カーヴェ』紙は、「方針を根本的に変え、学問・文学・政治論説を載せ、西洋文明のイランへの流布を最大の目的とする。狂信に対する聖戦 *jihād bar-dedd-e ta'assob* を行い、イランの国民性と国民団結を守り、ペルシャ語、

文学の純粹さを守り、内外の自由推進に努力することを目標とする。⁽⁴⁰⁾」と編集方針を変更した。その主眼は、なによりも無条件の西洋文明受容 *gabul va tarvije tamaddon-e orūpa bela shart va qeyd*⁽⁴¹⁾ にあった。この結果、『カーヴェ』紙では西洋の学術紹介、『シャー・ナーメ』などペルシャ文学を中心とするイラン文化の批判的紹介と共に、イランの政治・社会・文化への痛烈な批判がなされるようになった。⁽⁴²⁾

タキーザーデは新シリーズ各号に、「論点と観察」*"Nekat va Molahazat"* と題する論説を掲載し、イランの政治、社会が抱える様々な問題を指摘した。⁽⁴³⁾ この論説を中心に、立憲革命を経てなお近代国家への十分な改革がなされていないイランの状況が批判される。タキーザーデは、その原因を不毛な政治闘争、イラン史やイランの民族性に根ざした政治・宗教的偏向、大衆教育の欠如による「民度」の低さ、などに求めている。ただし、タキーザーデは単なるイラン批判にとどまらず、こうした問題を解決するための大衆教育普及をはじめとした改革案をいくつか提出している。ここには、『歴史的裁定によるイラン現状分析』で示された初期の立憲思想が、立憲革命における様々な経験を経て、さらに深化した姿を

見ることが出来る。『カーヴェ』紙においてタキーザーデの片腕とも言うべき存在だったジャマールザーデも、後年、この時期のタキーザーデを評した論文において、タキーザーデが『歴史的裁定によるイラン現状分析』で既に西洋文明受容を唱えていた点を指摘し、その思想的継続性・一貫性をタキーザーデの第一の特色としている。⁽⁴⁴⁾

サドル・ハーシェミー Mohammad Sadr Hashemi によれば、『カーヴェ』紙は、その記事の主題、内容、印刷、紙質の面で、それまで発行されたペルシャ語紙の中で最良の部類に属するとされる。⁽⁴⁵⁾これに関連し、ジャマールザーデは、『カーヴェ』紙の質を高めるためタキーザーデが努力を注いだ点に触れ、特に新シリーズにおいてドイツの資金援助なしで運営されねばならなくなったため、タキーザーデらが読者獲得の意味もあつて同紙の内容・形式の改善に没頭した結果、健康を害するまでに至ったことを告白している。⁽⁴⁶⁾こうした努力の末、『カーヴェ』紙はイランの知識人の間に多くの読者を獲得したが、同時にタキーザーデによる、「西洋文明の無条件受容」をはじめとする数々の主張は、イランの世論の反発に直面せざるをえなかつたとされる。⁽⁴⁷⁾

以上の点を踏まえ、以下、『カーヴェ』紙におけるタ

キーザーデの立憲思想を、その主要論点に分けて述べる。

第二節 歴史・文明観

タキーザーデは初期立憲思想におけるイラン史批判を継承・発展させ、イラン批判の根底に独自の歴史・文明観を据えている。タキーザーデによれば、各個人はその生まれ育った地の自然条件を始め、歴史・文明などの環境の影響を受けて独自の観点を持つようになる。諸民族の観点もこうした環境に影響されて異なったものとなる。タキーザーデは、東洋文明と西洋文明を比較して、おおよそ次のように述べている。

世界の諸民族は、大きく東洋と西洋に分かれ、各々の文明は、古代から異なった思想的基盤を持つ。東洋文明は精神的・天上的思想に基づいており、これは「インド的観点」 binesh-e hendi と名付けられる。古代インドに発するこの思想は観想的、超自然的傾向を持ち、時代と共にアリア・セム系諸民族に広まった。他方西洋文明は物質的、地上的で、古代ギリシャに起源を持つため「ギリシャ的観点」 binesh-e yunani と呼ばれる。「ギリシャ的観点」は理性、論理、証明に基づき、ローマを経てヨーロッパ

パに広まった。イギリスのフランシス・ベーコンらによつて実験による真理追究が開始され、東洋文明との格差は広がった。またキリスト教も元来東方宗教だったが、ヨーロッパ布教と共に「ギリシヤ的観点」を受け入れ、西洋文明を支えるものとなった。⁽⁴⁸⁾

タキーザーデは、「インド的観点」の代表であるインドが、「ギリシヤ的観点」を持つ小国イギリスの支配下に陥っているように、両観点の差は今や歴然としている、とした上で、不幸にも、イランの文明と民族的観点はインドに発している、と述べる。その原因としては、インド、イラン共にアリア民族であること、またイランは古代にギリシヤと戦争し、ギリシヤに対する反感からその文明を受容しなくなつたこと、ササン朝の時代、ヨーロッパと異なりキリスト教が圧迫されたこと、さらにイスラーム化の後、ギリシヤ哲学の翻訳・紹介にもかかわらず、ヨーロッパ・キリスト教諸国とその学問を忌避していたこと、などが挙げられている。⁽⁵⁰⁾ この結果イランはインド同様西洋に立ち後れている、とするのがタキーザーデのイラン文明観である。このように、イランの後進性の原因は、西洋文明と比べた文明観の相違に求められており、その後進性の根深さが初期立憲思想と比較し

てより強調されている。

歴史についても、タキーザーデは、「自然の原則は違えることなく、歴史は変更不能の自然な過程をたどり、速くも遅くもならない。」として、初期立憲思想同様、次のように歴史に自然法則に類する一定の法則性を認めている。

歴史の過程は、水の流れと同じく、ダムによつてせき止められても流れは止まらず、いつか騒動が起り、ダムを越えて停滞期の遅れを取り戻す。歴史は自然の進化を有し、一時停滞しているように見えても、裏では革命、騒動が起りつつある。⁽⁵¹⁾

西洋の進歩史観を反映したと思われるこうした歴史観に基づき、タキーザーデはイスラーム史、イラン史の客観的把握を求める。パン・イスラーム主義を論じた論説において、タキーザーデはイスラーム史に関し、イスラーム世界は衰退の方向に向かいつつあるとの評価を下し、要旨次のように述べている。

イスラームの基礎はムスリムの団結・親交にある。しかし、中国の長城から中部アフリカまで世界の大部分がムスリムのものだった時代、イスラーム諸国は相互に争い、やがて退潮に陥った。カステイリア

王国によってアンダルス王国が滅ぼされたのを皮切りに、オスマン朝はハンガリーからバルカンに後退し、ボルガ流域のタタールのハーンたちはモスクワの支配下に入り、オスマン領バルカンにロシア・オーストリアが介入した。ムスリムの賢人たちは将来の危機を予期し、ムスリム団結を説いたが、モンゴル侵攻とアッバース朝滅亡以後拡大した民衆の無知のため、実行されなかった。サファヴィー朝とオスマン朝は政治的・宗派対立を激化させ、英仏はシャー・アッバース一世にオスマン朝との戦争をそそのかして、オスマン朝による西方征服を東方に向かわせるよう仕向けた。ナーデル・シャーは、イスラーム団結の眞の推進者であり、シーア派にスンニ派の諸原則を受け入れさせる政策をとったが、スンニ派の諸信条を細部に至るまで厳密に守るべきことを主張するイスタンブールのウラマーによって、困難に直面した。カージヤール朝は再び宗派対立を政治的道具として使っている。こうしてイスラーム諸国は弱体化し、各地で西洋人の手に落ち、イスラーム世界は滅亡に向かいつつある。⁽⁵²⁾

イラン史についても、タキーザードは古代イランに一

定の評価を下しながら、一部ナショナリストによる、イラン史を六千年として古代イランを賛美する傾向に対し、「批判的歴史学によれば、イラン史は紀元前六世紀のキュロス一世に始まり、ゾロアスターも紀元前六世紀、その聖典アヴェスターの大部分は紀元前後、あるいはササン朝期に記述されたものに過ぎない。」⁽⁵³⁾として批判している。タキーザードは、「歴史を持たない民族は幸いである」とのフランスの格言を引用しつつ、実際には、「ある民族が革命・戦争を含めた歴史の桎梏を持たず、あまりにも平穩に過ぎすと停滞・滅亡に繋がる、としている。これに基づき、イラン近代史に関し、「イランのここ八〇年の停滞、桎梏の無さ、怠慢、そして「歴史の無さ」の結果、状況は死よりも悪化している。ナーセロッディーン・シャーの治世下、怠慢と無知が広がり、すべての人民は世界の進歩、国家の敵対勢力の陰謀・思惑に無知となった。称号や年金、収入や贈賄、トユールtoyulやタスイールtaswir⁽⁵⁴⁾などが流布し、政府の役職は競売にかけられ、利権は外国への最高の商品と化した。」⁽⁵⁵⁾旨の批判がなされている。

タキーザードは、この結果西洋文明の部分的・表面的導入しかなされず、眞の歴史研究者の間で、この時期記

すに値することはなにもなかったとして、カージャーレ朝後期の状況に否定的評価を下している。だが同時に、先に述べた歴史法則によって、イランはこの一〇年、立憲革命と第一次大戦を経験してきている、とも述べている。このように、歴史に衰退の原因を探る初期立憲思想の立場はここにも継承されており、その文明観、歴史観共に、イランの後進性の根深さを示すものとなっている。ただし、この背後には、歴史法則に則れば、イランは革命・戦争を経て、将来には停滞から進歩の方向に向かう可能性がある、との進歩主義的思想に基づいたイランに対する期待が存在するものとも考えられる。以下に見るように、『カーヴェ』紙ではこうした文明観・歴史観を根底にしたイラン批判がなされるが、タキーザードは、ナショナリストとして、イランの再興に対する期待をあくまで捨てていなかったものと思われる。

第三節 立憲革命・政治批判

タキーザードは、立憲革命以降の政治・社会状況を論ずる上で、イランの抱える大きな問題として再び極端なナショナリズムをとりあげ、この種のナショナリズムが政治と結合する危険性を訴えている。こうした問題が生

じる背景として、タキーザードは、「血が熱く、感情的で、ラテン系民族に似て熱しやすく冷めやすい」イラン人の民族性を指摘している。⁽⁵⁶⁾ タキーザードによれば、イラン人は、一時的にしかが有効性を持たないような目新しい信条に極端に溺れる傾向がある。それが有効性をなくして害をもたらすようになると、先覚者の警告によってようやく元に戻るが、戻ると今度は逆の方向に走る。⁽⁵⁷⁾ タキーザードは、このようにイラン人は常に極端から極端に走り、中道を保つことが困難である、と述べ、次のように、政治への偏向と極端なナショナリズムをその例として挙げている。

イランでは二〇一三〇年前まで、大衆は国政に無知で、政治に関与していなかった。国民、祖国愛、自由主義といった新たな感情はごく少数の間にとどまっていた。イラン内外の先覚者たちの宣伝活動と、政府組織の大変な荒廃・紊乱の結果、次第に革命が発生することとなった。熱意に燃えた人々が革命を支え、一年のうちに数百もの改革がなされ、王制は、憲法補則第四五条に則り、「国民からシャー個人に信託されたもの」と規定された。こうして獲得された政治的自由は、無私の人々、特に熱意ある若者た

ちの目を眩ませた。彼らは、祖国の完全な政治的獨立の夢想到に耽り、極端な愛国主義 *vatan-parastî-ye mofretî* への狂おしいまでの愛情に溺れた。彼らは政治に魅惑され、政治を職業として奔走するようになった。(日露戦争における) 日本の勝利に刺激され、政治的自由さえ得ればイランも日本同様に世界で抜きんでた存在となるだろう、との希望を抱いた。⁽⁵⁸⁾ タキーザーデによれば、革命の熱気が冷却するのに伴い、これら愛国主義に溺れた人々の一部は惰性的に政治に専念するようになった。タキーザーデは、こうした愛国主義者を「愛国屋」*vatan-chi* として批判し、これら「愛国屋」の宣伝によつてイラン人一般にも愛国主義の病が広がりつつある、として、凡そ次のように述べる。

極端な自画自賛、虚栄は最悪の倫理的病であり、これに対する唯一の治療法は明白な敗北を経験することである。それはちょうど浪費家が若い頃に親の財産を使い果たし、その破産の経験によつて初めて目覚め、幸運への一步を踏み出すのに似ている。イラン人は最近の極端な民族主義の新聞、書籍によつて自画自賛の災厄に巻き込まれ、イラン民族を諸民族のうち最高と信じ、西洋の発明・発見全てがイラン

タキーザーデとイラン立憲思想(下)

文明に発するとしている。特にイラン古代文明は遺物が多く残っていないため、自賛の市場を活気づかせている。これを癒すには、学問的真理を明らかにすることによつて、イラン人を物心両面での自らの貧しさに気づかせることである。これによつて、イラン文明は世界の学問と進歩に多くの貢献をしたわけではなく、ギリシャ文明から恩恵を被っていたことに気づくだろう。「愛国屋」は、アリア民族をその一部とするインド・ヨーロッパ系諸民族が、古代にアジアからヨーロッパに移住した、との説に基づき、イランを諸文明の発祥地としている。ところが実際にはその逆に、ヨーロッパからアジアに移住したことが学問的に証明されている。⁽⁵⁹⁾

タキーザーデは初期立憲思想を継承して、極端なナシヨナリズムに対する批判、及びイラン民族の相対化を進めている。この背景には、先にも述べたように、当時「政治主義」*siyasigari* の病により、「愛国屋」たちが増加しつつある状況があった。タキーザーデによれば、「愛国屋」たちは本来、教育ある都市階層出身で、立憲主義者 *mashrute-talaban*、或いは独立主義者 *esteqlal-katan* の名で国政に介入するようになったグループの

一部であった。彼らは表面的教育のみを受けた大衆的「政治屋」*siyasat-chi*であり、祖国愛を持つとはいへ、愛国主義を民族崇拜と混同している。彼らはイランの様々な文化・慣習を賞賛するのみで、西洋文明を深く究明しないため、西洋文明をその精神面まで含め受容することは困難である。⁽⁶⁰⁾

タキーザードは、「愛国屋」が元は立憲革命に参加した国民の「エリート層」でありながら、改革がすぐに達成されないを見ると当初の熱意を忘れ、愛国主義のみ振りかざして惰性的に政治に関与し続けていると批判する。このように、一九世紀の一部ナシヨナリストによって主張されていた極端なナシヨナリズムが、立憲革命の結果、イラン大衆の極端に走る傾向と相俟って政治・言論に色濃く反映されつつある点に警告が発せられる。タキーザードの批判の矛先は、「愛国屋」のみならず、立憲革命とその後政治状況全体にまで及んでいく。

タキーザードは、『カーヴェ』紙の旧シリーズにおいて、第一期国会（一九〇六―一九〇八年）から第三期国会（一九一四―一九一五年）に至る立憲革命期の国会の業績を四回に分けて論じている。⁽⁶¹⁾そこでは、イランの立憲制が必ずしも完全ではないことを認めながら、国民の

生命・財産が統治者の手中にあった立憲制以前の状況に比べ、革命によってこうした政治・社会状況が根底から変化した、としている。タキーザードは、特に第一期国会について、「立憲制の母」*madar-e mashrutiyat*と位置づけており、この国会は立憲制を根付かせることで専制支配から法による支配に移行させる目的を持ち、財政改革、信教の自由、司法の統一化など諸改革がなされた、と比較的高く評価している。⁽⁶²⁾

これに対し、新シリーズでは、イラン内政批判のトーンが激しくなるにつれ、立憲革命に対する評価も、旧シリーズにおける評価を踏まえつつ、より厳しいものとなる。タキーザードは立憲革命を総体的に評価し、「我々は決してイランの立憲制に結びついたヒジュラ暦一三二四年（一九〇六―一九〇七年）の政治革命を、不必要で「誤り」としたことはない。」として、凡そ次のように述べる。

現在の立憲制、また国会の欠点に言及するなら、共和政体の有りようを単独で論ずるべきではなく、専制政体との比較において論じなければならぬ。つまり、フランスの書物に基づいて完全な立憲制を想像し、人類の理想の完全な証明であるこの想像の体

制を、イランの立憲制と比較すれば、確かにイランのそれは砂漠の部族、アラブの部族長の合議制とあまり変わらないだろう。ただし、「小専制」*estebdad-e saghir*の時期（一九〇八—一九〇九年の反革命期）に宦官が国政を壟断し、バグ・シャーにイスラーム政府 *edāre-ye estāmi* ができ⁽⁶³⁾、或いはアミール・バハードル *Hoseyn Pasha Khan Amir-e Bahādor*（反動派王族。反革命期、軍務大臣を務める）が、タブリーズを包囲していたシャー崇拜の軍に給与を支給するため財政「計画」を策定したことや、または立憲革命直前の時期において、政府組織の業務時間と国税の殆どが、物欲に憑かれた卑しい者たちによって蕩尽され、彼らがそれだけで満足せず、ロシア、フランスの国庫まで頼りにしていたことと比べるなら、両者の相違は、アラブの部族長の合議制と、中部アフリカの黒人奴隸 *kaka-siyah-ha* の野蛮な「政府」⁽⁶⁴⁾ ほど離れていることがわかる。その上で、タキーザーデは、イランで運営可能な政体を三つに分け、第一を啓蒙専制、第二を悪い専制、第三を欠陥ある立憲制としている。なお第四は完全な立憲制だが、文明諸国でのみ実現可能で、イランでは不可能と

タキーザーデとイラン立憲思想（下）

⁽⁶⁵⁾ する。これは、シャーの反革命、及びロシアの最後通告によって当初の理想が一頓挫した革命の実態が反映したものと思われ、革命の過程で二度のイラン脱出を余儀なくされた「苦い」経験を持つタキーザーデならではの、厳しい評価といえるだろう。続けてタキーザーデは、啓蒙専制は啓蒙君主の出現が稀で、啓蒙的であっても時と共に専制政体の害があらわれる、として退けた上で、結局イランには悪い専制か欠陥ある立憲制しかありえず、両者を比べ、欠陥ある立憲制の方が良いことは疑いない、⁽⁶⁶⁾ としている。

しかしあくまで立憲制に欠陥があることには変わりがない。タキーザーデは、この原因の一端として、「愛国屋」、「政治屋」を含む新旧のエリート層の問題を指摘し、凡そ次のように述べている。

イランの人民は、他の諸国同様二つの階層に分かれる。そのひとつは指導層 *tabaqe-ye modire* である羊飼いの *rah* で、地区、村、町、国家、モスク、学校、バーザール、部族に関する物事に介入し、発言権を持つ。もうひとつは臣民 *ra'iyat* で、羊飼いに管理され、草をはむ。三〇年前は、官僚、貴族、地主、ウラマー、神学生、ロウゼハーン *roude-*

一三五（四六七）

乞丐 (カルバラの悲劇の吟唱者)、部族長、大商人等が指導層を形成していた。ヒジュラ暦一三二四年(一九〇六—一九〇七年)の革命後、勤勉で教育があり、祖国愛を持ち、特に弁舌の才ある若者がこの旧来の羊飼いに加わった。彼らは都市の臣民の出で、自らの才覚によって臣民を集め、バーザールやモスクで宣伝活動を行った。彼らは出自が卑しく、年若かったが、この無資本の才覚によって羊飼いの層に加わった。しかし、恐らくその羊飼いに占める割合は五%に過ぎず、しかも彼らの多くは名もない神学生や貧しいロウゼハーン、或いはとるに足らない王子 Mirza や書記 Hossain などの出身で、旧来の自らの権限を利用して影響力を増したに過ぎない。こうして、臣民は幾らか減少して羊飼いが増えたが、その逆に、古い羊飼いは減らず、影響力を保持したままである⁽⁶⁷⁾。

タキーズデーは、この結果、自由・平等・大衆の社会的諸権利といった民主主義の諸原則の実現の度合いに比べても、指導層がより拡大することになったとしている。このように、革命によって、国民主権・民主主義といった立憲制の理想とは逆の現象が生起してしまったことが、

欠陥ある立憲制の一因として指摘される。

タキーズデーに限らず、これまで、立憲革命に対する評価として、法制定をはじめ制度的には整備がなされたが、抜本的社会革命に至らなかつた点への指摘がときになされている。その例として、エツテハーディーエ Mansur-e Etehadye は最近の研究において、立憲革命には二つの側面があり、ひとつは憲法施行を始めとする立憲制度の実現だったが、もうひとつは貴族・地主などからなる支配層が変わらなかつたことである、としている。それによれば、革命前には、支配層の地位・権力はシャアの恣意に大幅に左右されたが、革命後はシャア・王族の権力縮小に伴い、貴族・地主層は国会を通じた政治活動によって地位・権力を拡大した。これに加え、一部の役人、新聞記者、若い知識人などが、やはり革命を機に、新興中産階層を形成するようになったとされる⁽⁶⁸⁾。これは、タキーズデーの指摘と大筋で一致しており、タキーズデーによる立憲革命批判の妥当性を裏付けるひとつの証左と見なしうらるだろう。

タキーズデーはこの問題をさらに追求し、こうした指導層、特に新たに指導層となった人々こそ、立憲制の諸原則に則って諸改革に邁進すべきである、としている。

しかし、彼らは、あるいは無原則の「政治屋」となり、あるいは有能で無私なメンバーからなる国会・内閣を形成することのみを国家の救済策と考えている。タキーザーデは、立憲制の国にとって一部の人が政治に携わる必要は認めるが、イランではこれが極端になり、千名の目覚めた賢者たちの内、一〇名のみが政治に関わるべきところ、実に九九五名までもが政治に関わっている、として、指導層を批判している。⁽⁶⁹⁾

こうした政治への偏向と共にタキーザーデが批判するのは、立憲主義者として革命に参加しながら、「愛国屋」、「政治屋」とは別の方向に進んだ少数の人々である。タキーザーデによれば、彼らは西洋文明をよく理解し、東洋文明より遥かに優っていることに気づいている。彼らこそ真の改革を先導すべきだが、西洋諸国の物心両面での進歩とイランの荒廃・衰退を見、改革が当初の期待通りに進まないと感じるや、自民族を厭い、西洋での快適な生活にあこがれるようになる。さらには祖国の悪口を並べて祖国の敵と化す。彼らは西洋に同化して、他の者が「祖国遊び」vatan-baziを止すように呼びかけている。タキーザーデはこれらの人々と「愛国屋」を比較し、不出来な子供を持った親の喩えを用いて次のように述べる。

タキーザーデとイラン立憲思想（下）

「愛国屋」は、我が子を溺愛し、隣家の出来の良い子と比べても優れていると信じる親に似ている。これに対し、自民族を厭う人々は、我が子が隣家の子に比べて劣っていることを認めはするが、劣っている点を改善する努力をなす代わりに我が子を捨て、隣家の子を我が子としてしまう親に似ている。タキーザーデは、こうした人々よりも「愛国屋」の方がまだ良い、としている。⁽⁷⁰⁾

このように、全体として『カーヴェ』紙の西洋文明受容のトーンは初期思想に比べ強まっていると感じられる。タキーザーデ自身が、革命と長期に渡るヨーロッパ滞在を経て、西洋とイランの格差をより深く実感したことも少なからぬ影響を及ぼしていると思われる。しかしタキーザーデはこれら西洋化した人々とは逆に、あくまでイランを見捨てず、一貫したナシヨナリストとしての立場を維持している。タキーザーデはエリート批判を総括して、「イラン最大の不幸は、今日の世界の文明、学問を修得しながら、同胞のことを思い、改革に着手する、（「愛国屋」、西洋化した人々以外の）第三のグループが存在しないことである。」と述べている。⁽⁷¹⁾ 逆に言えば、タキーザーデの拠って立つ立場が、この「第三のグループ」であったことが伺われる。

一三七（四六九）

「エリート批判」と同時に、革命の結果、大衆を含むイラン社会全体に、政治主義の風潮が広がりつつあることも指摘される。タキーザーデは、この風潮を、「ディプロマト」*diplomat*という倫理的特質によって、凡そ次のように表現する。

革命前は、「悪魔」*shaytan*、「狡猾」*naqola*、「詐欺」*hogge*などの表現が、非難されるべき悪徳に対し使われていた。革命後、「政治市場」の拡大に伴い、これに代わって「ディプロマト」との表現が使われるようになった。以前はこの特質は悪徳とされたが、最近では誇るべき美德と化し、一般に広がっており、バーザールの「政治屋」の小売商までが、毎晩自宅でドイツのビスマルク首相の真似を練習している。この語は、西洋での本来の意味を越え、政治・外交活動に特有の態度を有する人のことを指すようになった。こうした態度とは、例えば、寡黙、信条の秘匿、敵対者の信条への理解と妥協、タキーエ *taqiye* (信仰・信条の秘匿)、複雑な言い回し、自然な感情の喪失、人民をだます努力、人民への嘲笑、曖昧な返答、矢継ぎ早の質問、及び質問の機会を与えないこと、などである。こうした特質の流布

は、一民族の倫理を墮落させ、大衆倫理を腐敗させるものであることは疑いない。この驚くべき特質は、最近イランにおいて非常に流布している。その理由としては、イランでは立憲革命の後、大衆の間に政治市場が拡大し、人々が外国の政治についてよく話題にし、聞き及び、読むようになったことが挙げられる。⁽⁷²⁾

タキーザーデは、このように大衆が、外交官や英露外相の「陰謀」を見聞きし、西洋の政治家や国会議員が皆狡猾であり、だからこそ西洋諸国は発展している、と信じた結果、この悪徳が広まるようになった、としている。タキーザーデによれば、これに伴い、革命前に称揚されていたウラマー、ロウゼハーンに代わって、政治職に就くことが尊敬の対象となった。才覚ある全ての人は地位・名誉を得るためこの道に進んでおり、呉服商、米穀商、行商人までが、「朝はシェイホル・エスラーム *sheykh al-estam* (高位ウラマーの称号) の家に、夕方はエマーム・ジヨム *Emam Jome* (金曜礼拝導師) の家に、日没には内相のもとに、夜には商人団結政治集會に赴き、「国民」*millat* の諸問題についての宰相、シャーとの談判やら外交談義に熱中する。翌朝には宮廷會議か

ら招待があり、夕方には有力議員出迎えに町を出る。」
といった有り様である。⁽⁷³⁾

タキーザーデの批判は、曲がりなりにも欠陥ある立憲制が実現したイランにおいて、指導層・大衆共に、地位・名誉を得るため、或いは真の改革を理解せずに政治に熱中している状況に向けられている。タキーザーデによればこの結果、「テヘラン城」*gale-ye Tehran*の中で内閣が季節ごとに変更し、内閣の政策計画は実行されず、ただ政府職員が入れ替わるだけという不毛で不安定な政治状況が生まれている。その背後には一部部族長、都市のウラマー、「国民」の絶対的代表とされるテヘラン・バーザールの小売商代表、また「政治屋」たちの陰謀が渦巻いている。地方諸州の治安は乱れ、道路は維持されず、商業、農業は停滞している。立憲制において重要な政府の継続性は望むべくもない。⁽⁷⁴⁾『カーヴェ』紙特別最終号では、真の危機はイギリス、ロシア、オスマン朝など外国勢力にあるのではなく、内部の政治的腐敗にあることがあらためて強調されている。⁽⁷⁵⁾

これまで見てきたように、タキーザーデは、立憲革命批判を通じて、初期立憲思想には見られなかった新興エリート層、及び大衆に対する批判を展開している。新興

エリート層に関しては、タキーザーデ自身がこの層に属していたと思われ、その批判はより具体的で厳しいものとなっている。しかし、こうした批判の根底には、彼らが「愛国屋」、「政治屋」と化したのは政治的野心によるばかりではなく、正確な立憲制と西洋文明に対する理解が乏しいためであり、同様に大衆が政治主義に偏向するのも、こうした理解がエリート層以上に欠如しているところが大きい、との見解が存在することが了解されよう。ここから、タキーザーデは初期立憲思想を發展させ、教育改革をより強調するようになる。いずれにせよ、こうした批判を通じ、立憲革命を主導した立憲主義者の側の問題と、大衆の知識の欠如の問題が複合的に作用して、欠陥ある立憲制の一因となり、ひいては政府関係者からバーザール商人まで、タキーザーデが描いた近代的民族国家の形成とは合致しない活動を続ける要因となっていることが示される。

第四節 宗教批判とイスラーム・モダニズム

初期思想に比べ、『カーヴェ』紙では宗教批判がより明確化している。ただしそれは、初期思想同様、宗教そのものではなく、宗教指導層の問題に向けられている。

タキーザーデは、タブリーズにおける自らの宗教教育の経験を踏まえ、ウラマーの抱える問題を凡そ次のように指摘する。

タブリーズにおいて、私(タキーザーデ)の住んでいた街区では、ピーシュナマーズ *pish-namaz* (礼拝導師) が、教育ある人、或いは賢い神学生に対して、「彼は敬虔ではない」“*palan-e-sh kaj ast*” (字義通りには、「彼の鞅は傾いている」の意) と非難することがよくあった。また神学校でも、イスラーム法学から逸脱して哲学、天文学などを学ぶ者に対し、同様の非難が浴びせられた。⁽⁷⁶⁾ あるとき、神学校で、「溺れる者の礼拝」*salvat al-ghariq*、すなわち日没時に水に落ちて溺れる者が日没の礼拝をいかに行うか、との主題を論じていた。ある神学生は、他の神学生と異なり町出身で、多少の自然理性を残していたため、溺れる者が実際にこの議論の結果を執行できると指摘した。すると教師のモジュタヘドは怒って、「彼は敬虔ではない」と非難した。私もまた町の近郊出身で、「宗教諸学の徒」*al-umma* とは逆にある程度ペルシャ語の素養があり、自然理性を残し、文法や法源学の書の細部に盲従して

はいなかったため、これを聞いて、なぜ他の神学生の鞅はまっすぐなのにこの神学生の鞅は傾いているのか、またなぜこの神学生は未だに鞅を捨てて盲信の馬小屋 *tavliye kur-dehri* から出てしまわないのか、と考えをめぐらせた。その結果、次のことに気づいた。我々の中には我々の上に乗ろうとする者たちがいる。彼らは乗る際に、我々が暴れたり鞅が傾いていたりせず、従順に盲目的模倣の馬勒 *atsar-e taqlid-e kur-kurane* をつけて、破門の鞭 *shallaqe takir* を彼らに渡すことを望んでいる。我々は皆、鞅を持ってはいるが、少数の者の鞅は傾いている。鞅を持たない者は稀で、見つければ、「イスラーム法の裁定者たち」*hokkam-e shar'* の教令により処刑が許され、その血の代価は西洋人一名、或いは獵犬の血の代価にも及ばない。彼らは国民の背に乗って、隷属の馬衣をまとわせ、鞅を置くことで糧を得ている。⁽⁷⁸⁾

タキーザーデは続けて、後に自らの「鞅」も傾いてしまった旨告白している。タキーザーデがここで「鞅を持たない者」としている中には、ムスリム以外の宗教的少数派、特に異端とされたバハイイヤーアザリー派をも含

むものと思われる。ここには、立憲革命において少なからぬ貢献をなしたとされるこれら宗教的少数派に対する理解を見ることができ⁽⁷⁹⁾。だが、タキーザーデが、「鞍」を捨てた、と述べていない点は重要で、ウラマーのあり方に疑問を持ちながらも宗教否定にまでは至らなかつたことを暗示している。しかも、タキーザーデの批判は、ウラマー全体にはなく、その一部の倫理的腐敗により強く向けられているように受け取られる。

タキーザーデによれば、一般の人々は、慈悲、純潔、家族愛、勇敢さなどの美点を持っており、本来、宗教も人間的美点についての多くの命令を有し、イスラーム法もこうした美点、倫理性と無縁ではない、とされる。真の宗教者なら、宗教の命ずる美点のみならず、他の人間的美点も有するが、イスラーム法の命令、禁止のみに心を占められるようになると、人間的な善悪、美醜の判断はいっしか消えてしまう。タキーザーデは、こうした人々がひとたび本質的信仰を失うと、イスラーム法への過度の偏向によって既に人間的美点が失われていたため、いかなる倫理的拘束もない無原則な人間となる、とし、これらの人々を「無宗教のモッラー」⁽⁸⁰⁾ *mollā-hā-ye bī-dīn-e monker-e madhhab* と呼んで批判している。

タキーザーデとイラン立憲思想(下)

このように、極端な愛国主義と同様、タキーザーデは極端なイスラーム法への偏向も批判する。この背景には、立憲革命において、西洋法導入への反対を始め一部保守系ウラマーの反対に直面した経験があることも推測される。ただし、タキーザーデの批判を反語的に解釈すれば、イスラーム法のみを固執せず、西洋文明をいたずらに否定せず、人間的倫理をもって柔軟な信徒指導、法運用を行う「真の宗教者」を望む、とのイスラーム・モダニズム的思考が息づいていることが伺われる。

こうした宗教への一種の期待は、イスラームの団結を説くパン・イスラーム主義への一定の理解にも示される。旧シリーズにおいては、ドイツ側についたオスマン朝への協力を呼びかける意味もあって、パン・イスラーム主義がより強調されている。タキーザーデはイスラーム団結思想の創立者として、ナーデル・シャーと共に、アサダーバーディー *Seyyed Jamal al-Dīn Asadābādī*⁽⁸¹⁾ を高く評価している。タキーザーデによれば、アサダーバーディーは、滅亡に向かいつつあるイスラーム世界の救済策として、ムスリムとイスラーム諸国の団結、及び新文明の受容以外にない、との思想を明確化し、実行可能なものとした最初の人物であり、インドからエジプトまで

この思想を広め、多くの追隨者を育てた。その後この思想はイスラーム諸国全てで開花し、三つの流れに分かれた、とされる。ひとつはイスラーム諸派間の宗教的・倫理的団結を目指す流れで、政治性は少ない。第二は「空想的過激派」*efrat-parastān va pazandegān-e soudā-ye Kāshān*が信奉する、イスラーム統一政府樹立を目指す流れで、今日は影響力を持たない。第三が、イスラーム諸国の政治的団結を目指す流れで、アサダーバーディーが主唱したものである。タキーザーデは、これが現実化すれば、オスマン朝、イラン、アフガニスタンの政治的団結、及び他のイスラーム諸民族の植民地からの独立と団結に繋がるだろう、との期待を表明している⁽⁸²⁾。

タキーザーデはここで、イラン・ナシヨナリストとして、イスラーム諸国の自立性を維持した上での団結に賛同している。これに対し新シリーズでは、オスマン朝のアブドウル・ハミト二世によるパン・イスラーム主義の「宣伝」にイランが乗って、独立を失う恐れが一時出てきたとするなど、パン・イスラーム主義の否定的面の記述がより目立つようになる⁽⁸³⁾。ただし、新シリーズでは、「東西の著名人」*"Mashahir-e Mardoman-e Mashreq va Maghreb"*と題する評伝シリーズの第1号として、再び

アサダーバーディーを取り上げている。そこでは、「傑出した人物であり、当時、殆どのイスラーム諸国で重要な運動の源となった。」として、イスラーム団結に捧げたその生涯を称揚している⁽⁸⁴⁾。このように、タキーザーデの基本的立場は変わらなかったものと思われ、帝国主義に対し、民族的自立性を保ちながらムスリムの独立・団結を求め、宗教的少数派にも理解を示すモダニズム的イスラームを求めるものであったと言いうるであろう。

第五節 改革案

新シリーズ第一号では、第一次大戦後のイランは戦前に比べ、慢性疾患に罹った状況にあることが指摘されている。タキーザーデによれば、ロシア等による軍事介入はなくなった代わりに、イギリスによる、より巧妙な「浸食」が進行しつつある。それは武力のみならず、学問、理性、策略まで使ったもので、イランの経済的従属化と、恐らくは知的後進性維持を目的としている⁽⁸⁵⁾。このように、一九一九年のイギリス・イラン協定でイランのイギリスへの従属化が進みつつあった状況下、イランの病根としてイギリスの危険性が訴えられている。だがタキーザーデは、これに対処するのに、直接的政治闘争を

主張しない。代わって、第一に、無条件の西洋文明受容・普及と西洋への「無条件降伏」*taslim-e motlaq*、及び西洋の文化、慣習、学問、産業から生活様式まで、言語を除く全ての受容が提唱される。続いて第二にペルシャ語・ペルシヤ文学の維持・発展、そして第三に西洋諸学の普及、及び学校設立、教育普及を通じて大衆の繁栄が提唱される。そしてこのためには、ウラマー、政治家、新聞、アンジヨマン等から物心両面の援助を得る必要がある、としている。タキーザーデは以上の点を要約して、「イランは、外面的、内面的、また物質的、精神的に西洋化 *farangi-ma'ab* すべきであり、それで充分」と述べている。⁽⁸⁶⁾

このように、初期立憲思想に見られた西洋の立憲制導入と国民への教育普及という改革案は、『カーヴェ』紙においても基本的に継承されている。ただしここでは、政治制度の枠を越えた西洋文明の全面的受容が強調されている。表面的には、この主張は、タキーザーデが批判する西洋化した人々の思考様式と大差ないように思われる。しかし、先に述べたように、西洋化した人々がイランの後進性に絶望し、西洋と同化して改革から手を引いたのに対し、タキーザーデは、進歩主義的思想に基づい

て、将来におけるイランの発展に対する期待を捨ててはいなかった。タキーザーデは、西洋文明への深い理解とナシヨナリズムを一致させ、あくまでイランの後進性の真因を追求し、根本的解決策を提示しようと努めている。ペルシヤ語・文学という、イラン民族のアイデンティティの核をなす要素の護持を唱えている点も、これを反映するものであろう。

『カーヴェ』紙では、西洋文明導入の手段として教育普及が特に強調されている。タキーザーデによれば、その背景には、西洋と比べたイラン大衆の近代教育のレベルの差が存在する。例えば、西洋大衆全ては南極、北極の存在を知っているが、イラン大衆すべては、大地が牡牛の角の上に乗っており、*ダッジャール* *ط.ب.ع.ب* (最後の審判の日の前に現れるイマームの敵) はイスファハーンの井戸に潜む、と信じている。⁽⁸⁷⁾ タキーザーデはさらに進んで、大衆とは無知と同義であり、「人民が大衆であること」はある民族にとって最大の不幸である、と述べている。⁽⁸⁸⁾

こうした大衆批判の背景には、自らを新たなエリート層に位置づけていたと思われるタキーザーデの、大衆に対する多少の軽蔑の念が存在したであろうことは否定で

きない。しかし、タキーザーデ自身がタブリーズの大衆層出身だったことを考え併せれば、こうした批判は、タキーザーデの若き日の日常的経験と観察に基づき、革命の経験を経てさらに研ぎ澄まされていった結果であることは想像に難くない。すなわち、大衆が指導層、或いはウラマーに盲従し、また極端な愛国主義に向かい、「ディプロマート」の模倣をするのも、すべては正確な西洋文明の把握と学問的知識が欠如していることによるのであり、これを改善するには、大衆教育の普及がなによりも優先する、との改革案の前提として、大衆批判はなされていると言えるだろう。

タキーザーデは、一部で、教育改革より政治改革を優先すべきである、との主張が見られる点に反対し、大衆教育を通じた識字率向上こそ唯一の解決策であり、他の手段は枝葉末節である、と述べている。⁽⁸⁹⁾ タキーザーデによれば、何度国会開催、クーデター、アンジヨマン設立を繰り返しても内部的荒廃から救われることはなく、大衆が政治職に代わって教育の重要性を自覚し、ヴァラーミン(テヘラン近郊)の学校が国会同様に尊敬されない限り、真の改革はなされない。タキーザーデは、もし立憲革命後の一五年、政治に偏向せず、教育改革に着手

していたなら、現在イランは一〇〇ファルサフ Farshaf (一ファルサフは六・二四キロメートル) 前進していたが、実際には、教育改革は成果が出るのが遅いためならず、新聞・アンジヨマン・政党設立や内閣変更のみが繰り返された結果、イランは遅れてしまった、としている。⁽⁹⁰⁾ このように、タキーザーデは、自らも推進した立憲運動の限界を認めた上で、凡そ次のように述べる。

真の治療法は、大衆自身が大衆教育を受け入れ、望むこと、そして国民の指導層が、大衆教育こそ文明、進歩、独立、改革、繁栄の根本である旨を理解することにある。こうした大衆による受容は、国家の覚睡した層、イラン救済を誠心誠意望む人々すべてが、一致してこの重要性を広めることによって可能となる。政治家も、多くの時間をこのために費やし、教育普及をなす人々を援助し、敬意を払うべきである。こうして大衆への呼びかけを繰り返すことによって、大衆の嗜好は教育に向かうこととなる。そのときこそ、商人が遺産の三分の一を学校に与え、雜貨商がホムス khoms (宗教上の五分の一税) をセイエドたち sadat (預言者の子孫の家系) の学校に寄付し、農民がザカート zakat (救貧税) を貧困層の子弟の

教育のために納め、巡礼者が自分はメッカに、子弟は欧州に送って両方の御利益を得ることになろう。ワクフも女子学校に寄進されることとなり、それが横領される恐れがあるなら、アメリカ系学校の管理者にワクフ管理が任されることとなろう。そのとき初めて、三〇万の学生が学校で学び、一五〇万から二〇〇万の人々が読み書きできるようになる。こうして国家は殆どの欠陥、荒廃から救われることとなる。麻薬の害を述べる小冊子によって五万の人々が麻薬を止め、新聞の一記事によって、祖国が危機に瀕した際、一〇万の人々が国家防衛のため徴兵に応募し、一冊の良書によって大きな社会・倫理的革命がなされよう。また国会も、一部の人々がその西洋の語を使って望むように、真の「パルロマン」partoman となり、ゴルパーイエガン、カーゼルーン、アルダビール、トイセルカーンから読み書きできる庶民が議員に選ばれることとなろう。そのときこそ、読み書きできる人々の間に、愛国的であると同時に勤勉な人物が増えるだろう。その三分の二が腐敗し、無原則と化してしまっただとしても、残りの三分の一で国家改革のためには充分であろう。

タキーザーデとイラン立憲思想(下)

古来言われるように、一輪の花では春は来ず、また数名の無私の人々がいかに熱意に燃えても、氷の大海を暖めることはできない。ミールザー・ジャハンギール・ハーン Mirza Jahangir Khan Shirazi (立憲派新聞『スーレ・エスラーフィール』*Sure Eshraf* 編集主幹。一九〇八年の反革命の際、処刑)、タブリーズの議員ハージ・ミールザー・エブラーヒム Haj Mirza Ebrahim Aqa (タブリーズ選出第一期国会議員としてタキーザーデと共闘。一九〇八年の反革命の際、処刑)、あるいはシェイフ・モンマド・ヘヤーバーニー Sheykh Mohammad Kheybani (一九二〇年、タブリーズに革命政権を樹立。鎮圧され処刑)などは、各々荒廃したイランに現れた神の光、天使の顕現であった。もし教育度の高い国であったなら、彼らの無私努力は大変有益であっただろうが、彼らは暗闇の中の蠟燭のように燃え尽きて、イランは暗闇に戻ってしまった。⁽⁹⁾

自ら代表的立憲主義者として革命を主導したタキーザーデにとって、同志ともいべきこれらの人々への理解は深いものがあつただろう。なればこそ、自らを含め、これら一握りの立憲主義者、ナシヨナリズム指導者がい

一四五 (四七七)

かに政治改革を目指しても、イランは根本的に変わらな
い、とする認識には重みがあるものと言えるだろう。タ
キーザーデは、国民大衆が、これら一握りの先覚者の信
条を真に理解し、その後が続いてこそ、真の国会設立を
含めた政治改革は可能となる、と主張している。そのた
めには、これら先覚者を受け入れる土壌としての「民
度」の高さが欠かせず、それは大衆教育普及を通じての
み可能である。

こうしてタキーザーデは改革への明確な提言を行う。
それは第一に、政治家、国民指導層が教育の重要性を流
布し、大衆に受け入れさせること。第二に、学問と識字
率向上のための諸組織を設立すること。第三に、基盤が
安定し、秩序ある諸学校の設立、特にアメリカ系学校は
政治・宗教的野心を持たず、国益に繋がる。第四に、テ
ヘランをはじめ各地における大衆のための図書館設立。
第五に、国民にとって有益な書物を平明なペルシャ語に
翻訳し、安価で提供するために必要な資金の収集。そし
て第六に、文明国に数百名の留学生を早急に派遣するこ
と。タキーザーデは、日本もこれを行っており、これら
留学生の一部でも帰国すれば、国家に大きく貢献するだ
ろう、としている。⁽⁹²⁾

「民度」向上の一環として、教育改革と並び、麻薬撲
滅、飲酒の停止、性病等悪質な疾病の蔓延防止が唱えら
れる。タキーザーデは、大衆に広まるこうした悪質な要
素を除去することで、教育普及の基となる倫理的、体質
的土壌が培われる、としている。同時にタキーザーデが
特に強調するのは、大衆へのスポーツ普及である。タ
キーザーデによれば、スポーツは西洋の進歩の秘密の一
端をなしており、スポーツによって、民族の活力、独立、
文明、特に倫理的貞節さ、真摯さが保持される。国民の、
困難に対する抵抗力は強まり、陰謀や虚言は無くなって
いく。⁽⁹³⁾このように、タキーザーデは初期立憲思想に比べ
て、西洋の学問・技術面の導入のみならず、西洋に倣っ
た倫理面の独立性回復をより強く唱えるに至っている。⁽⁹⁴⁾

一九二一年、新シリーズの終わりが近づくとつれ、改
革への主張のトーンが微妙に変化していく。同年二月の
レザー・ハーンによるクーデターを始め、イラン内政の
変動が反映したものと推察される。タキーザーデによ
れば、大衆への改革こそ根本的治療法だが、イランは現
在倒壊しかけた古い家屋同様、早急の修理が必要とされ
る状況にある。中央政府が不安定なため、諸州の治安が
乱れ、先進地域で独立運動が起こっている。これを解決

するには、欠陥ある立憲制の制度的整備が欠かせないが、政治家、国会議員には十分な立憲制度の知識がない。タキーザーデは、そこで、国家運営の専門的知識を持つ外国人顧問を雇うべきである、と主張し、シヤスター Morgan Shuster (一九一一年、国会決議により財務長官としてアメリカから招かれる。ロシアの最後通告により翌年解任) の轍を踏まぬよう、これら顧問には十分な権限を与え、政治的陰謀から守るべき旨を強調している。⁽⁹⁵⁾

新シリーズ最終号では、外国人顧問が充分活躍できるように、中央政府の強化と治安維持の必要性が訴えられている。⁽⁹⁶⁾ ここでは早急の措置として、外国人顧問を使った政治改革に力点が置かれるようになっていく。ただし、これも教育改革と無関係とはいえず、政治家を始め大衆の間において、立憲制度に対する理解が不徹底であることが背景にある。つまり、教育普及を通じた「民度」向上がなされ、立憲制を含む西洋文明への理解が浸透するまでの暫定的措置として、外国人顧問は雇用されるべきである、というのがタキーザーデの意図するところであった。同様に、国会法案のイラン全土での実施を始め、立憲制実現のためには、中央政府の安定が不可欠であるとされる。タキーザーデはナシヨナリストとして、へ

ヤーバーニーの運動を含めイラン各地の民族主義に立脚した独立運動に一定の理解を示しつつも、国家の統一性を優先している。⁽⁹⁷⁾

『カーヴェ』紙で提唱された諸改革案は、一九二二年のアメリカ人財務顧問ミルズポー Arthur Millsbaugh 招致を皮切りに、レザー・ハーンによる軍事強権を使った「強力な中央政府」確立、そしてパフラヴィー朝期のテヘラン大学設置を含む本格的教育普及の開始によって、少なくとも表面的には、次第に実現の方向に向かっていく。タキーザーデ自身、政治家、外交官としてパフラヴィー体制に参入していくこととなる。しかし、国民主権、議会政治を旨とする立憲制の理想は、レザー・シャール独裁の下、依然として実現には程遠い状況にあった。

逆にいえば、ある意味で、『カーヴェ』紙に示されるイラン批判、そして諸改革案は、イラン社会の本質を突いた鋭さを持つがゆえ、タキーザーデ自身が教育普及に關して述べているように、その実現には何世代もの期間が必要とされるものであったといえるかもしれない。

おわりに

歴史観、文明観に基づいたタキーザーデの立憲思想は、後年に至るまで、本質的に変わることなく継承されていった。ただその強調点は、国民の倫理性回復に一層重きが置かれるものとなつていった。

タキーザーデは、一九五〇年に執筆した論文において、イラン衰退の原因を、歴史に起因する国民の倫理的腐敗に求めている。そこでは、イランの問題として、内部的専制と度重なる外国の侵攻により、威信、勇らしさ、勇氣といった倫理的美点がイラン人、特に指導層の間から欠乏してしまつている点が指摘されている。ただし、大衆の間では、ズールハーネ *zur-Khane* (古式体操の道場) やギルドで倫理性は保持されてきており、シーア派がイマーム・ホセインを讃えるのも、不正に屈服しないその勇敢さに原因がある。タキーザーデは、こうした倫理性を復興させ、国民全体に拡大するために、精神面を重視した大衆教育の普及、及び神学校教育の改善が必要である、と述べている。⁽⁹⁸⁾

晩年にさしかかった一九六〇年の講演では、立憲革命当時、西洋文明の全面受容を唱えた点を省みて、多少過

激、急進的であつたかもしれない、との省察がなされている。タキーザーデによれば、当時の若者の一部は、西洋文明との圧倒的格差を前にして、西洋文明の不必要な部分まで受容しようとした。自然と進化の緩やかな流れを悟らず、革命的变化を求めた。『カーヴェ』紙の諸論説で革命的変革を主張したのも、ある程度はこの種の過激さによるものだった。⁽⁹⁹⁾

しかしこの講演においても、基本的に変わらない文明論、歴史論が展開されている。すなわち、ギリシャ文明は学問の根本を樹立し、イスラーム文明はこれを基に繁栄した。モンゴル征服後、イスラーム文明は衰退し、西洋文明が繁栄してきている。立憲革命は、イランに後進性からの脱却を迫る最初の衝撃だった。それは弱い運動ではあつたが、時代の新文明を受容する端緒となるものであつた。現在でもイランには後進性が残っている。だが政治・社会的自由が保証される限り、文明がイランの隅々にまでいきわたるのに長い期間はかからないだろう。タキーザーデは続けて、文明発展のためには、教育普及、西洋の文化慣習受容以上に、文明の精神を学び、祖国愛、勇氣、自己の信条への献身を有することなどが重要である、としている。同時に、極端な愛国主義に起源を持つ

国粹主義が再び批判される。タキーザーデによれば、ナシヨナリズムの語は中庸から逸脱した場合、もはや当てはまらない。国民の後進性の因となるのはこうした国粹主義者、及び無知な指導者に従う大衆、そして利己主義で無原則な西洋化した人々である。タキーザーデは結論として、「西洋文明の受容は必要だが、国民伝統のうち良い点は保持されるべきである。西洋文明の選択的受容は不可能ではない。威信、勇氣、倫理性によって、他民族の慣習に埋没してしまわないことが可能となる。日本、インドはこの例である。」と述べている。⁽¹⁰⁾

このように、タキーザーデの中庸を得たナシヨナリス
トとしての立場は、晩年に至るまで健在であったと考えられる。同時に、タキーザーデにとって、西洋文明は、生涯にわたって、自国の文明より優れ、受容されるべきものと認識されていたことが伺われる。タキーザーデの立憲思想、そしてイランに対する諸改革案の根底には、常に、いかにして西洋文明を受容し、イランを民族国家として復興させるか、との主題が横たわっていたといえる。この意味で、タキーザーデの思想は一九世紀から二〇世紀初頭にかけての、西洋諸国による世界分割がなされつつあった帝国主義の時代状況を色濃く反映し、その

枠組みの中で形成され、そこから抜け出すものではなかったといえよう。

本論で見てきたタキーザーデによる立憲革命批判は、具体的諸事件に詳しく言及したのではなく、かなり全体的・抽象的なものとなっている。だが、それだけに、近代から現代へ移行しつつあったイランの時代状況の中で、革命を総体的に評価する上でのひとつの手掛かりを提供していると言えるかもしれない。中でも、大衆に対する批判は、本論冒頭でも指摘した、革命におけるタキーザーデら立憲主義者と大衆の間の乖離を、あらためて示唆するものとなっている。『カーヴェ』紙における大衆批判の激しさから、それが、タキーザーデの目指した革命の方向性に対する一定の障害となっていたことが推測される。これは同時に、モジャーヘデーイン、或いは非公式のアンジヨマンといった大衆的諸組織の革命における位置づけに、再考を迫るものとなっていると言えるだろう。また、新たなエリート層に対する批判に見られるように、大衆のみならず、革命を主導した立憲主義者の側にも様々な問題があったことが浮き彫りにされている。

本論を通じ、タキーザーデの初期立憲思想と『カー

認できる記事のうち、本論で使用したものののみを記す。
ページ数は、イーラジ・アフシャル編集の復刻版に
従った。

ヴェ』紙における論説を比較して、多くの共通点が見られることが明らかとなったが、後者において、初期思想では明確に表明されていなかったこうした大衆批判、新興エリート層批判、そして宗教批判がなされていることも判明した。これは、タキーザーデが、革命の経験によつてこうした諸問題を強く認識するようになったことを暗示するものといえる。以上の点を総合するなら、イラン社会全体において、立憲制を含む西洋文明に対する理解度が相対的に低かったことが、革命を通じて短期間のうちに抜本的改革がなされ、ひいてはタキーザーデの目指す近代的国民国家の形成を妨げる一因となっていた、と考えられよう。タキーザーデが初期立憲思想において、西洋の立憲制の完全な導入を改革のひとつの柱としていたのに対し、『カーヴェ』紙においては、イランには欠陥ある立憲制しか根付かない、として、ある意味で初期の改革案の半分を放棄し、教育改革による「民度」向上を強調するに至っていることも、これを裏付けるものといえるだろう。

『カーヴェ』紙におけるタキーザーデ執筆記事

『カーヴェ』紙においてタキーザーデが執筆したと確

旧シリーズ

一九一六年

1-1. Jan. 24. "Aghaz." pp. 1-3.

1-2. Feb. 8. "Ruzha-ye Tarikhi-ye Iran." pp. 9-11.

1-12. Sep. 15. "Ettehad-e Manafe'-e Iran va

'Othmani." pp. 73-76.

一九一八年

3-1. Feb. 15. "Doure-ye Jadid-e Mashrutiyat dar

Iran." pp. 177-180.

3-2. Mar. 15. "Doure-ye Jadid-e Mashrutiyat dar

Iran (2)." pp. 193-194.

3-3. Apr. 15. "Doure-ye Jadid-e Mashrutiyat dar

Iran (3)." pp. 200-203.

3-4. Jul. 15. "Doure-ye Jadid-e Mashrutiyat dar

Iran (4)." pp. 219-230.

新シリーズ

一九二〇年

- 5-1. Jan. 22. "Doure-ye Jadid." pp. 279-280.
 5-6. Jun. 18. "Manāzere-ye Shab va Rūz." pp. 349-352.
 5-7. Jul. 17. "Nekāt va Molāheẓāt." pp. 356-357.
 5-8. Aug. 16. "Nekāt va Molāheẓāt." pp. 367-369.
 5-10. Oct. 15. "Molāheẓāt va Kheyālāt." pp. 387-390.
 5-11. Nov. 13. "Nekāt va Molāheẓāt." pp. 405-408.
 一九二二年
 6-1. Jan. 11. "Dībache-ye Sal-e Dovvom-e Kāve." pp. 435-438.
 6-2. Feb. 10. "Nekāt va Molāheẓāt." pp. 455-457.
 6-3a. Mar. 11. "Nekāt va Molāheẓāt." pp. 475-476.
 6-3b. Mar. 11. "Mashāhir-e Mardomān-e Mashreq va Maghreb." pp. 479-485.
 6-4. Apr. 10. "Nekāt va Molāheẓāt." pp. 495-500.
 6-6. Jun. 8. "Kheyālāt." pp. 537-540.
 6-8. Aug. 6. "Nekāt va Molāheẓāt." pp. 577-581.
 6-9. Sep. 4. "Nekāt va Molāheẓāt." pp. 601-607.

- 6-10. Oct. 3. "Kheyālāt-e Günāgūn." pp. 617-619.
 6-12. Dec. 1. "Eṣlāḥāt-e Asāsī va Eṣlāḥāt-e Fourī." pp. 657-662.
 一九二二年
 7-1. Mar. 30. "Khatar-e Esteghlāl-e Siyāsī yā Khatar-e Engerād-e Mellī va Nezhadī?" pp. 694-696.

注

- (37) Afshar ed. 1372/1993-1994, pp. 181-188.
 (38) 黒柳 1969, p. 432. また『カーヴエ』紙創刊号における『イラン学者の博士 Oskar Mann による「カーヴエ」の旗』"Kāve va Derāfsh-e Kavyān" (*Kāve* 1-1, pp.3-4) と題する解説文が掲載されている。
 (39) *Kāve* 1-1, pp.1-3.
 (40) *Kāve* 5-1, pp.279-280.
 (41) *Kāve* 5-1, p.280.
 (42) Vatandoust 1985, pp.52-53. なお、同書は『カーヴエ』紙におけるタキーザーデの思想を扱った欧米で殆ど唯一の研究だが、タキーザーデの執筆した記事・論説以外のものをタキーザーデ執筆として一部混同している難点がある。例えば、同書では、タキーザーデによる宗敎批判を紹介する中で、『明白な否定』"Enkāf-e 'Ayan" (*Kāve* 6-3, pp.476-479) の論説を引用している。

(Vatandoust 1985, pp.132-133)。他方、『カーヴェ』紙の各記事の執筆者名については、ジャマルザーデがその多くをイーラジ・アフシャールに教示し、Afshar ed. 1356/1977-1978, pp.9-18の目次に、各記事の題と共に記載されている。これに従えば、同論説はジャマルザーデ自身が執筆したものである。

(43) 「論点と観察」はすべてタキーザーデによるもので、ここでは右論説を始め、Afshar ed. 1356/1977-1978, pp.9-18の目次によって、タキーザーデ執筆と判明するものを使用する。

(44) Dhamalzadeh 1962, p.749.

(45) Hashemi 1364/1985-1986, p.129.

(46) Dhamalzadeh 1962, p.749.

(47) Dhamalzadeh 1962, pp.747-748.

(48) *Kāve* 6-10, p.617-618.

(49) *Kāve* 6-10, p.618の注において、タキーザーデはアリア民族の説明として、民族学、言語学上、古代に中央アジアに住み、次第にインド系とイラン系の二つのグループに分かれた民族のことを指すとしている。インド南部諸民族を除くインド系と、アフガン、クルド、タジクなどを含むイラン系諸民族はその言語が同一起源で、皆このアリア民族に属す。ただし、アリア民族を全てのインド・ヨーロッパ系諸民族に当てはめるのは誤りで、アリア民族はインド・ヨーロッパ系諸民族の一派に過ぎない、としている。このように、タキーザーデはイラン民族をヨーロッパ諸民族と同根視する「俗説」

には反対している。

(50) *Kāve* 6-10, p.619.

(51) *Kāve* 1-2, p.10.

(52) *Kāve* 1-12, pp.73-74.

(53) *Kāve* 5-7, p.357.

(54) トニールは国有地のうち、軍人・官僚の職務に応じ、徴税権が与えられた土地で、立憲革命当時は私有地化される傾向にあった。タスイールは物納に代わる税の現金納で、政府にとって不利な換算率で納付されていた。Browne 1966, pp.238-239.

(55) *Kāve* 1-2, p.9.

(56) *Kāve* 6-9, p.604.

(57) *Kāve* 6-9, p.604.

(58) *Kāve* 6-9, p.606.

(59) *Kāve* 5-7, pp.356-357.

(60) *Kāve* 5-11, p.406.

(61) *Kāve* 3-1, 3-2, 3-3, 3-4. なお、この記事は、改訂を付され、A.H.1337/1918-1919年、『カーヴェ』紙編集部の出版書籍の一冊として、*Mohhasar-e Tarikhe Majles-e Mellat-ye Iran*との題名でトルリンで出版された。Afshar ed. 1349-1357/1970-1971~1978-1979, vol. 5, 再録。

(62) *Kāve* 3-1, pp.178-179, *Kāve* 3-2, pp.193-194.

(63) 一九〇八〜一九〇九年の反革命の時期を指す。バーグ・シャールはテヘラン西郊に位置し、もと乗馬訓練用の広場だったが、後に果樹園となり、立憲革命期にはシャールの住居があった (Najmi 1362/1983-1984,

pp.52-53)。一九〇八年に国会との対立が激しくなると、モハンマド・アリー・シャーはゴレスタン宮から急遽バークシャーに移り、国会砲撃を行った。タキーザーデが「イスラーム政府」と呼んでいるのは、ファズロッラー・ヌーリー Sheykh Fado'lah Nuri を中心とする保守系ウラマーが反革命に協力した事実を反映しているものと思われる。

- (64) *Kaue* 6-9, p.603.
- (65) *Kaue* 6-9, pp.603-604.
- (66) *Kaue* 6-9, p.604.
- (67) *Kaue* 6-9, p.601.
- (68) Eftehadiye 1996, pp.15-19.
- (69) *Kaue* 6-9, p.604.
- (70) *Kaue* 5-11, pp.406-407. なお、タキーザーデはこれ

に続け、ダーウインの学説を引用して、西洋化した人々を批判している。ダーウインはカナリア諸島に棲息するある種の飛べない蠅について研究した。その結果、この蠅は元来普通の種だったが、飛べる蠅はすべて海に向かって落ちてしまい、飛べない弱い種のみが島に残ったと判断した。ダーウインによれば、ここから、生存競争の法則は、常により完全な種の生存に帰結するわけではなく、「適者生存」に終わり、ある生物の退化に繋がることもあり得る、とされる。イランも同様で、退化に向かう可能性がある。なぜなら、学問の羽を得たその民族の一部が、無関心と利己主義から、残りの者を無知と貧困の島に置き去りにして、快適な大洋に飛び去ってしまう

からである。

- (71) *Kaue* 5-11, p.408.
- (72) *Kaue* 6-3a, p.475.
- (73) *Kaue* 6-4, p.495.
- (74) *Kaue* 6-8, pp.577-578.
- (75) *Kaue* 7-1, p.694.
- (76) Taqizade 1340/1961-1962, pp.280-296 (一九六一年、

タキーザーデがイラジ・アフシャルの要請に応じ、自らの幼年時からの教育文化活動について記した回想)によれば、タキーザーデ自身、一〇代半ばから宗教教育にあきたらず、哲学、天文学、数学などのイスラーム古典諸学、またシェイヒー派(一九世紀前半に創始されたシーア派の一分派。イスラーム法学を中心とする正統派に対立する傾向を持っていたとされる。 Algar 1969, pp.66-70)の学問を学び始めた。このため正統派ウラマーからときに非難されることとなったが、これら諸学を通じ、次第にフランス語、西洋医学などの西洋の学問に目覚めていったとしている。

- (77) タキーザーデを含め、タブリーズの住民はアゼリー系イラン人であり、ペルシャ語は日常語としては使われず、学習を通じて修得するものだった。
- (78) *Kaue* 5-10, pp.387-388.
- (79) 宗教少数派の立憲革命に際しての活動の例として、アフアリーは、一九〇四年にテヘランで設立された革命委員会

の九名の中心メンバーのうち、マレコルモタカツレミーンを含む三名がアザリー派、一名がバハイイーで

あつたと指摘している。Afiary 1996, p.41.

- (80) *Kāwe* 6-2, pp.455-456. なお、タキーザーデは続けて、極端な愛国主義者も、愛国主義に心を奪われたため、諸改革の遅滞を見て愛国主義の熱が冷めると共に無原則となった、と批判している。

- (81) タキーザーデは、『カーヴェ』紙において「アサダーバーディー」ではなく、通称の「アフガーニー」を使用している。ただし、同紙に掲載したアサダーバーディーの伝記において、タキーザーデはこの人物についてアフガニスタン出身説とハマダーン近くのアサダーバード出身説があることを紹介した上で、後者が正しい旨認めている。 *Kāwe* 6-3b, pp.479-480.

- (82) *Kāwe* 1-12, pp.74-75.
 (83) *Kāwe* 6-9, p.605.
 (84) *Kāwe* 6-3b, p.483.
 (85) *Kāwe* 5-1, p.279.
 (86) *Kāwe* 5-1, p.280.
 (87) *Kāwe* 5-6, p.350. なお、本編は西洋と東洋の様々な学問の相違を比較する連載記事で、ジャマールザーデとの共同執筆。

- (88) *Kāwe* 5-8, p.367.
 (89) *Kāwe* 6-4, p.496.
 (90) *Kāwe* 6-4, pp.496-497.
 (91) *Kāwe* 6-4, pp.498-499.
 (92) *Kāwe* 6-4, pp.499-500.
 (93) *Kāwe* 6-6, p.537.

- (94) タキーザーデは、この他にも、『カーヴェ』紙において何回か改革案を提出しているが、その内容は概ね同一と見なしている。例えば、新シリーズ第二年第一号では、17項目に亘る改革案が提示されているが、信教の自由、及び女性の権利擁護などを除き、大衆教育を筆頭として本論で述べた改革案と殆ど一致する内容となっている。

- Kāwe* 6-1, p.436.
 (95) *Kāwe* 6-8, pp.579-580.
 (96) *Kāwe* 6-12, p.660.
 (97) *Kāwe* 7-1, p.695.
 (98) Taqizāde 1329/1950-1951, pp.172-181.
 (99) Taqizāde 1339/1960-1961, pp.185-186.
 (100) Taqizāde 1339/1960-1961, pp.187-198.